

令和4年10月21日（金曜日）

藤沢市（神奈川県）

○市の概要（令和4年4月1日現在）

- 面積：69.56k m²
- 人口：441,547人 ●世帯数：198,213世帯
- 一般会計予算規模：1,613億円



藤沢市は、神奈川県南部中央に位置している。市域を東西に走る国道1号線付近を境として、北は標高40mほどの相模野台地、南は湘南砂丘と呼ばれる平地に二分され、最南端に江の島がある。相模湾に面した、気候温暖、風光明媚な自然環境に恵まれた町である。

東京からは50km圏内にあり、JR東海道本線、小田急江ノ島線、江ノ島電鉄線、湘南モノレール、横浜市営地下鉄ブルーライン、相模鉄道いずみ野線などの交通の便に恵まれている。

藤沢のまちは、鎌倉時代の終わり頃、第4代遊行上人の呑海が遊行寺を創建し、全国を巡る遊行の重要拠点となった。この頃から「藤沢」の地名が記録に現れはじめ、江戸時代には東海道五十三次の6番目の宿場として藤沢宿が設置され、江の島詣の足場としてにぎわった。

明治以降は、農村地帯を背後に控えた商業の中心地となり、1887年（明治20年）に東海道本線藤沢駅が開設された頃から湘南海岸が避暑地として注目された。鵜沼・片瀬・江の島は別荘地・海水浴場となり、さらに江ノ島電鉄線、小田急電鉄江ノ島線の相次ぐ開通もあって発展してきた。

1908年（明治41年）4月に藤沢町となり、1940年（昭和15年）10月1日には市制を施行、その後1955年（昭和30年）までに近隣の町村を合併し、現在の市域となる。1960年代に入ると、経済の高度成長を背景として北部中心に数多くの工場を誘致し、工業都市としての性格を強めていく一方、1970年代には、各地に商業施設が進出し、湘南地域の商業の中心地となった。また市西部や北部地域の開発が進むにつれて、多くの人々が移り住み、次々と新しい市街地が形成されていった。

門前町、宿場町としてまちの第一歩を踏み出した藤沢市は、首都圏近郊の観光・保養・住宅地として、また工業・商業都市として発展し、さらに図書館や体育館などの文化施設、大学などの教育施設の立地が進み、学園・文化都市としての性格も加わり、多種多様な機能を持つ都市となっている。

藤沢市は、古いまちと新しいまちが、それぞれの歴史と特性を持ちながら、ひとつの都市を形づくり、湘南地域の経済、文化の中心的都市として発展している。

◆視察内容

1. FujisawaSST SQUARE

Fujisawa サステイナブル・スマートタウンについて（現地見学）

●視察の目的

杉並区は令和3年11月に、2050年までに温室効果ガス排出量を実質ゼロにする「2050年ゼロカーボンシティ」の実現を目指すことを表明し、区民や事業者と共に脱炭素社会の実現に向けた取組を推進することを宣言している。

この取組を進めるにあたっては、先進的な取組を進める企業と藤沢市が官民一体となって行っている共同プロジェクトである、Fujisawa SSTの取組が参考になるのではないかと考え、視察に伺った。

●視察内容

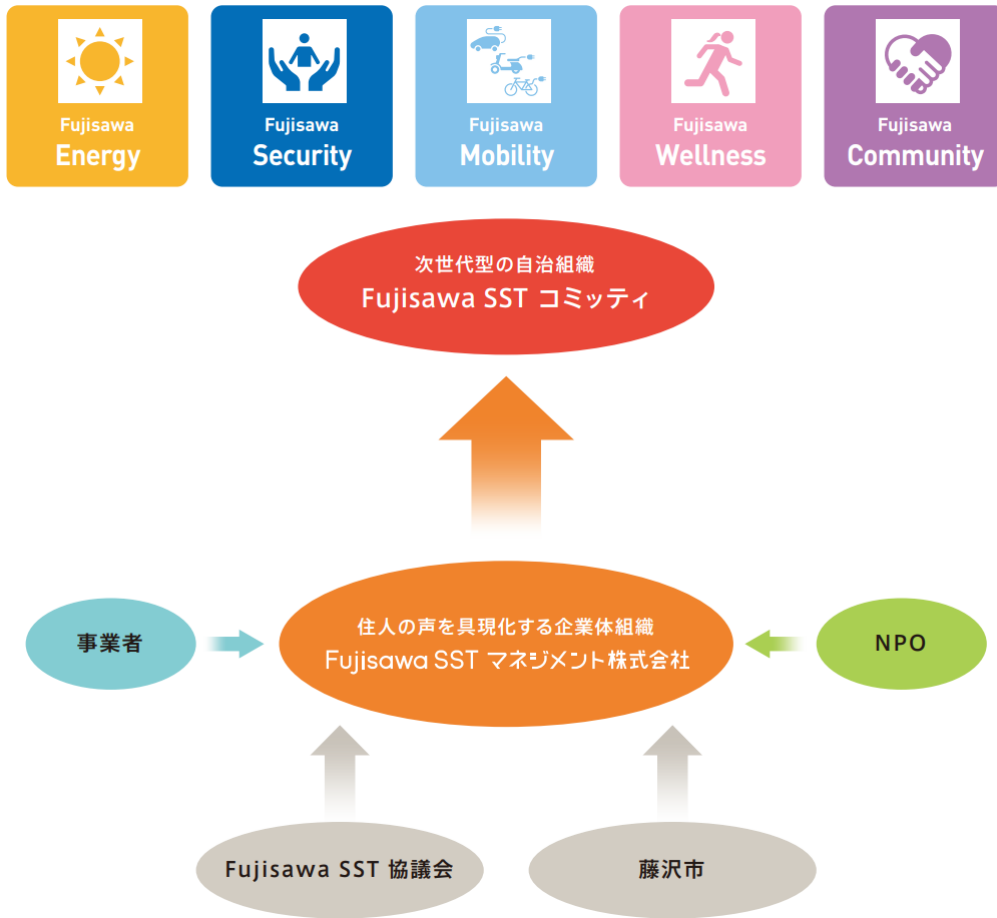
集合・解散場所である SQUARE Center でタウンコンセプトムービーを視聴し、まち全体の概要の説明を受けた上で、徒歩で見学ツアーを行った。

（経路）Fujisawa SST SQUARE→湘南 T-SITE 1・2号館→コミュニティソーラー→風の道・ガーデンパス→コミッティセンター→ウェルネススクエア

●所感

配送ロボットやトータルモビリティサービスなど、スマートシティらしい実証実験が日常の風景の一部として行われている様子を目にしながら、現地視察は行われた。約600戸の戸建て住宅の全てに太陽光パネルが設置されており、住戸単位、さらにまち全体でエネルギー創出・消費の状況が見える化されている点や、風の道・ガーデンパスにおける住棟の配置や道路の取り方など、委員同士でも専門性の高い意見交換が行われ、ガイドの SST SQUARE 職員に対する質問も途切れることなく行われた。

健康・福祉・教育施設が一体となったウェルネススクエアにおける多世代交流の仕掛けや、「100年先」もこのまちで安心して暮らすというコンセプトに沿った形で、当初通常の方譲マンションとして計画していた敷地最北部（JR線路沿い）の高層住宅について、サービス付き高齢者向け住宅として企画変更を行う等、まちに暮らす住民の声をまちづくりに生かす次世代型自治組織「Fujisawa SST コミッティ」の活動を、まちの姿からも感じ取ることができた。



2. 神奈川県藤沢市

(1) Fujisawa サステイナブル・スマートタウン事業と行政のサポートについて

●視察の目的

午前中に現地見学した Fujisawa サステイナブル・スマートタウンの成り立ちなど、まちづくりの経緯を座学で学ぶため、視察に伺った。

●視察内容

1961年（昭和36年）から操業開始したパナソニックグループの工場閉鎖・撤退に伴い、パナソニックから藤沢市に対し跡地のエコタウン構想の提案があった。2010年（平成22年）に Fujisawa サステイナブル・スマートタウンに関する基本合意が行われ、2012年（平成24年）に事業認可、2014年（平成26年）に街びらきが行われた。藤沢市は当時「地域から地球に広がる環境行動都市・藤沢」を掲げており、パナソニックは「エレクトロニクスNo. 1の環境革新企業」を志向していたことから、日本初の環境創造まちづくり拠点として、両者が協働・連携し、都市における低炭素化への取組を推進することがまちづくり方針に定められた。

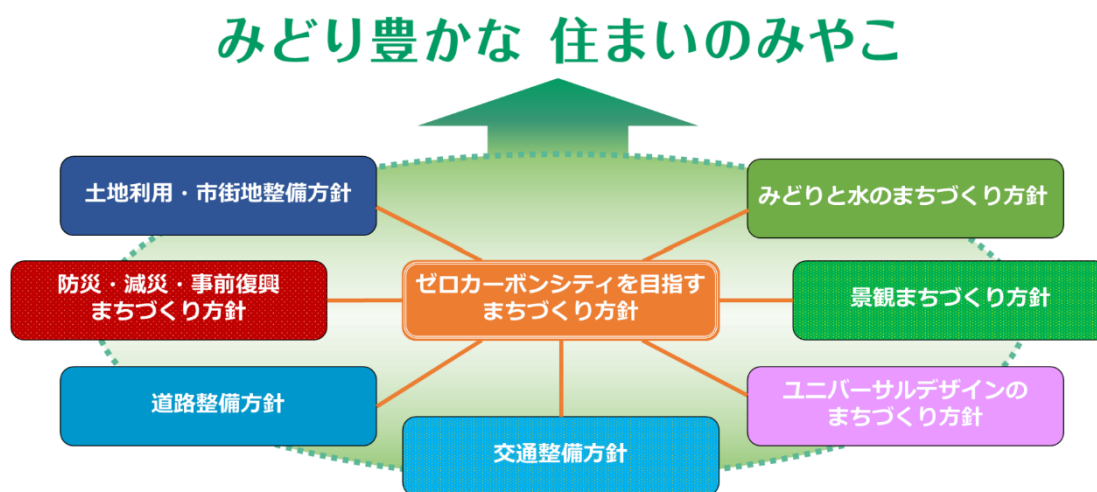
委員からの質問は、行政のまちづくりや財政面におけるSSTとの関わり方や、通学区の公立学校への影響、JR路線をまたぐ形で検討されている（仮称）南北線の整備状況など多岐に渡り、予定の時間を超過して行われた。



(2) 藤沢市地球温暖化対策実行計画について

●視察の目的

「杉並区基本構想」に掲げる、区の将来都市像のイメージとまちづくりの到達すべき目標を明らかにするものとして現在策定作業が進められている「杉並区まちづくり基本方針」では、まちづくり方針の核をなすものとして「ゼロカーボンシティ」が据えられている。



Fujisawa サステイナブル・スマートタウンが描く未来は多義的であったが、杉並区としてはやはり環境面での先進性をより深く学ぶ必要性が高いと考え、令和4年度が計画始期となる藤沢市環境基本計画と、その下位計画である藤沢市地球温暖化対策実行計画、藤沢市環境保全職員率先実行計画について学ぶ機会をいただいた。

●視察内容



藤沢市地球温暖化対策実行計画では、世界の動き、日本の動き、県の動きについても計画の中で触れつつ、市内の温室効果ガス排出量の現状については、産業部門、業務その他部門、家庭部門、運輸部門、廃棄物部門ごとの現状分析と、それを基礎としたBAU（現状維持ケース）を算出するという流れで、まずは目標年度である2030年度の温室効果ガス排出量を基準年度比13%減と見込む将来推計を示した。

その上で、施策単位の削減目標を細かく設定し、施策の積み上げによって基準年度比45.8%減まで温室効果ガス排出量を減らしていく、という構造になっている。施策単位の削減目標は、例えば業務その他部門における「クールビズの実施徹底の促進」0.01%や、運輸部門の「公共交通機関や自転車、徒歩による移動促進」1.27%など、細かい行動基準を施策として定めている点が印象的だった。

また、藤沢市地球温暖化対策実行計画では、行政や事業者の前に市民を取組の主体者として明確に位置付け、従来型の政策誘導で促すことが難しい「テレビの画面は明るすぎない設定に努め、テレビを見ていないときは電源を切ります。」「冷蔵庫にはものを詰めすぎないようにし、季節によって適切な温度設定に努めます。」といった取組を、計画を通じて市民に求めている。

日常生活における地球温暖化対策

家庭の中ではさまざまな電化製品を使用することにより温室効果ガスを排出しています。日常生活における地球温暖化対策を一人ひとりが実践することで、一つ一つの取組の効果は小さくても市域全体で取り組むことにより大きな効果となります。身近な地球温暖化対策を心がけ、継続して取り組んでいくことが重要です。

照明の点灯時間を短くする (54Wの白熱電球1灯の点灯時間を1日1時間短縮した場合)	CO ₂ 削減量：9.26kg/年 節約金額：530円/年	
省エネ型のLEDランプに取り替える (54Wの白熱電球から9WのLEDランプに替えた場合)	CO ₂ 削減量：42.30kg/年 節約金額：2,430円/年	
	冷房は必要な時だけつける (設定温度28℃ 冷房を1日1時間短縮した場合)	CO ₂ 削減量：8.82kg/年 節約金額：510円/年
	暖房は必要な時だけつける (設定温度20℃ 暖房を1日1時間短縮した場合)	CO ₂ 削減量：19.14kg/年 節約金額：1,100円/年
	フィルターを月に1回か2回清掃する (フィルターが目詰まりしているエアコン(2.2kW)とフィルターを清掃した場合の比較)	CO ₂ 削減量：15.01kg/年 節約金額：860円/年

委員からは、これら計画内に記載されている具体的な金額を算出するためのコンサルティング会社との協業について、計画の周知について、藤沢市環境保全職員率先実行計画についてなど活発な質疑がなされ、また随行理事者の環境部長からもBAU（現状維持ケース）の具体的な算出における技術的な質疑が行われるなど、濃密な議論が展開された。



●所感

Fujisawa サステイナブル・スマートタウンについては、工場跡地の大規模開発であることから、杉並区に引き寄せて活用できる材料はかなり限定的になるのではないかと訪問前には考えていた。実際に現地を視察してわかったことは、このまちの本質は官民連携、それも官が大きく立場を引いて民間の創意工夫を後押しする関わり方によって、まちの魅力や付加価値の向上が実現されるということであり、まちづくりにおける行政としてのあるべき立ち居振る舞いのモデルケースとして非常に有益な学びとなった。杉並区議会でも、民間活力を区民福祉の向上にどのように役立てていくか、協業のあるべき姿は、といった議論が活発に行われており Fujisawa サステイナブル・スマートタウンと藤沢市の関係性はその議論に資するものであったと感じる。

また、藤沢市地球温暖化対策実行計画については、世界的な取組である地球温暖化に対して、基礎自治体の取組でどこまで貢献できるのか、それが明確でない中、財政的な面も含めどこまで踏み込むのか、という点は杉並区議会でも議論になっている。そういった中で、現状分析を精緻に行った上で目標達成に必要な行動を導き出し、行政、事業者だけでなく、市民にも環境行動を具体的かつ多面的に求めるといった計画のあり方は、杉並区としても今後策定される（環境以外も含めた）各種計画の参考にすべきと感じた。

市民（区民）との協業を進めていく上で、杉並区は区民の創意を活用すること、また既に存在する民間のビジネスやボランティアに絡めていくことでWin-Winを目指す手法を好むが、藤沢市のように協業の主体として尊重する上で、規範的な行動を要求するという関係性も、成熟した主体同士の協業としては考えられるのではないかと、という示唆を得ることができた。

